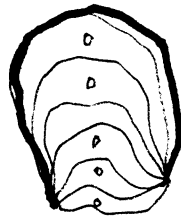


# 平和弁論大会

## 一般教育総合科目活性化の試み



佐藤 年明

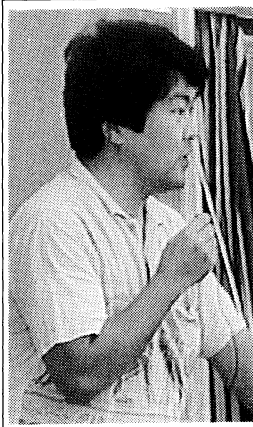
(三重大学・教育学部)

### 弁論大会優勝者のスピーチ

「(前略) 正直言ってしまうと、この『平和問題』の授業も、なんとなくという感じで取りました。しかし佐藤年明先生の講義の中で、『戦争を知らない私たちは、平和の語り部になることができるのか。』という言葉が出てきた時、はっとしました。せっかくこの講義を取ったのだから、自身自身が『平和の語り部』になれるよう、一歩でも近づきたいと、この時以来強く思うようになりました。ところが、

自分ではどうしたらいいのかわかりません。せっかくやる気が出てきたのに、なんだか大きな壁が私の目の前に立ちはだかるようでした。そんな時、生協委員をやっている関係で、いろいろと平和に関する活動に参加することができました。(中略) 七月の最後の飯島「宗一——引用者註」先生の講義を覚えているでしょうか。飯島先生は、『平和の道しるべ』というの、一人一人の人間である。初めは目に見えない力が、平和の道しるべになるのだ。人間は希望や自信、理想を持つことが大切である。』とおっしゃいま

した。なるほど、思い返してみると、私に衝撃を与えた人たちは、まさに『平和の道しるべ』ではないでしょうか。先生のおっしゃったことも、『平和の語り部』になるには大切なのではないのでしょうか。前期のこの講義も終わろうとしています。私は『平和の語り部』になろうとしているものとして、いったいどれぐらい近づくことができたのでしょうか。まだまだ勉強不足です。まだまだ自分には自信が持てません。けれどもここで焦ってみてもしかたがないことです。周囲を見渡せば、いくらでも平和を考える機会があります。私一人だけが考えるのではなく、みんなで考



さとう・としあき ●一九五四年、京都市生まれ ●教育方法学（教育課程論）を担当。また一般教育の「総合科目・平和問題」を三年前の発足時から担当 ●「学習者の主体的参加」が最近の教育実践及び研究のテーマ ●この授業のテキストとして作成した佐藤他編『平和を学ぶ』（汐文社）を、ぜひ多くの方にお読みいただきたい。

え、行動するなどして、一人でも多くの人が『平和の語り部』になるよう努力してみませんか？（拍手）

（久野絵美『平和の語り部』になるのは）

これは、三重大学一般教育において今年度前期に開講した「総合科目・平和問題Ⅰ」の最終回（九月三日）に行なった「私にとつての平和」弁論大会で、受講生による投票の結果第一位となった学生のスピーチの一部である。

弁論大会に出場したのは約百二十名の受講生の中から選ばれた十名である。夏休み直前に締め切った「弁論レポート」を、この授業を担当した十人の講師の中のレギュラー担当者（人文学部教官一名、教育学部教官三名、非常勤の元教育学部教官一名）が分担して採点し、高得点者の中で、特にアピールする内容を持つレポートを十編選び出した。

これらのレポートを書いた十人の受講生に夏休み中に弁論大会出場資格を得たことを通知し、レポートをもとに当日のスピーチ原稿を準備するよう指示した。担当教官代表である私のミスで、出場通知を発送したときには弁論大会は約十日後に迫っていた。同封した出場意志確認の返信ハガキが、全員から返ってくるかどうか心配したが、当日までに十人全員が出場の意思を表明し、何人かはスピーチについて相談に来た。

当日は十人の弁士が次々と壇上に立ち、与えられた七分間の範囲で、それぞれの平和への思い（講義に対する批判なども含めて）を語った。

全てのスピーチが終了した後、受講生全員による審査を行なった。配布した審査用紙に自分が推薦する最優秀弁士一名の番号と推薦理由、ならびに弁論大会全体への感想を短時間で記入してもらい、これを回収して集計し、最優秀者一名、優秀者二名に賞状（…と言っても私がワープロで印刷した簡単なもの）と賞品（担当教官の著書や講義の参考文献）を贈呈した。残る七名の弁士にも、参加賞を贈呈した。受講生たちは盛大な拍手を送った。



最優秀に選ばれた久野絵美さんの弁論

## 授業へのゲーム性の導入

この授業の担当教官代表である私は、授業で「優秀者」を表彰することに、当初は内心反対だった。自分が担当する専門科目の授業では、個々の受講生の学習への努力に対して高い評価を与えた場合にも、それを全体の場で公表して賞賛するようなことはしていなかった。ましてや賞品を与えることなど…。

しかし、レギュラー担当者五名による今回の授業の準備過程で、授業を「活性化」するための一方策として他の教官から提案されたこの「懸賞付き弁論大会」にあえて反対はしなかった。そして授業を終えてみて、やはりやってよかったと考えている。特に弁士に指名された受講生たちが大変真剣に取り組んでくれたことは大きな成果だと思う。何人かの弁士の感想は後に紹介したい。

ここで述べておきたいのは、授業の中にゲームの要素を持ち込んだことが、授業の雰囲気活性化したということである。

カタイ話と生真面目な雰囲気だけでなく、「遊び」を取り入れれば盛り上がるのはあたりまえ、と言われるかもしれない。また逆に、そんなものは大学の講義と呼ぶに値しな

い邪道だと眉をひそめる向きもあるかもしれない。

もちろん、講義内容の学問的あるいは社会的重要性を認識させることによって学生の積極的な学習活動を引き出すことが、教師の指導の「本道」である。しかし、最近の学生の学習への参加姿勢を考えた場合、「本道」とは別のところにも学習への参加を促す「しかけ」を用意しておく必要を私は感じている。この講義で、学生が本務である講義受講による学習に対してあえて賞品を用意してまで「競技」を組織したこと、さらに、「競技」結果の判定を受講者の投票に委ねたことは、確かに学生を刺激した。弁士に指名された受講生は、レポートへの高い評価に激励されてよい意味で緊張して弁論に臨んだし、それ以外の受講生も単なる受け身の「聴衆」ではなく「審査員」たることを要求されたことによって、弁論を注意深く聞き、その中で弁士の主張と自分の考え方を突き合わせて真剣に吟味したようである。

最優秀弁士の投票結果について、授業の場では順位のみ発表したが、実は一〜四位までが二十一〜十九票でほぼならんでおり、「大接戦」であったことと同時に、当日の出席者一〇六名の中で、弁論への評価が大きく分れていたことがわかる。授業の終わりに行なった「表彰式」で賞状と

賞品の授与を担当した教官は、投票結果が僅差であり、したがって誰が「優秀」で誰が「最優秀」だという区別はあまり意味がないと強調していた。その意味では結果的にも「優秀者を表彰する」という試みはやはりゲームでしかなかった。弁士にとっては、自分の弁論が聴衆からどう評価されるのか、また聴衆の側は、十人の弁士の中で誰が一位になるのか、自分が推薦した弁士が入賞するのか、という関心から、興味深く結果発表を聞いたことだろう。みんなが「ゲームに参加した」わけである。ワクワクするということほどの盛り上がりではなかったかもしれないが、少なくとも普段の授業よりはやや身を乗り出して参加した学生が多いと思う。授業へのゲーム性の導入は効果を発揮したといえる。

授業の中でごく一部の学生にだけ賞品（もちろんよりいっそう学習を進めることを促す学習文献ではあるが）を与えたことについては、私自身は今もやや抵抗があるが、それも「ゲーム」として割り切ればいいのかもしれない。

### 弁論大会の位置づけ

なぜ「弁論大会」なのか？

このことを説明するには、「総合科目・平和問題」のそ

タート以来三年間の経過に簡単に触れねばならない。

私は一九八九年に三重大学に赴任したので、それ以前から（言うまでもなく昨年七月の「大学設置基準」改訂のずっと以前から）積み重ねられてきた三重大学における一般教育改革への模索については、紹介できる立場にない。ただひとつ言えることは、一般教育のカリキュラム改革の環境として、私が赴任した翌年の一九九〇年から、それまで一、二講座しかなかった「総合科目」を十講座近くにまで大幅に拡充することになったことである。新設された「総合科目」の一つである「平和問題」に、私も教育学部の同僚から誘われて参加することになった。

初年度の「総合科目・平和問題」は、教育学部の四人の教官が計画し、各自の専門分野や関心に基づいて自ら行う講義と、それぞれのつながりを生かして招聘した非常勤講師の講義（いずれも原則として一回完結）によって内容を構成した。

準備の討議の過程で問題になったのは、「総合科目」の「総合」をどう考えるかであった。専任・非常勤を含めて七人の講師が次々教壇に立つ（私は非常勤講師を招聘せず映画を視聴させたが）、いずれも平和（より詳しいテーマは「核の脅威と平和への模索」をテーマとしながらも、異な

る角度から講義を行なう。それぞれの講義を聴講させることだけで授業を終わるなら、「総合は受講生各自の頭の中で」と要求することになる。

しかし、学生から見れば、このような授業形態では、各講師は輪番制で自分の担当だけのノルマを果たしているにすぎず、授業全体の見通しは何も示されないという不満を感じるであろう。

学習成果の評価についても、講師が多いのでそれぞれがハードな学習課題を出すわけにもいかないし、また全講師が協議して単位認定することも困難だから、おのずと感想程度のレポートや場合によっては出欠確認だけで各講師が出した点数を単純に集計するしかない。

担当者の熱意とは別にこうしたシステム上の問題が学生の受講姿勢に影響を及ぼす。つまり輪講式の総合科目は学生から見れば「楽勝科目」つまり単位の取りやすい科目と受け止められがちなのである。

また、これは担当教官の議論の中で出たことではなく、私個人のとらえ方なのだが、「総合科目」で特定の学問分野に収まりきらない学際的人格を持つ現代的課題を取り上げる、という担当者側の意欲的な位置づけも、これを学生の側から見れば結局カリキュラム上は自然・人文・社会の

いずれかの分野に読み替えなければ単位として認定されないため、「複数の分野のいずれかの単位にできる穴埋め科目」と見なされかねない。

「総合科目」の存在意義について、やや悲観的に過ぎるとらえ方かもしれない。しかし三重大学において一般教育科目を受講する学生の平均的な意識状況を推量すれば、「総合は全講義終了後に個々の学生の頭の中で行なわれるべきものだ。」という認識はあまりにおめでたく、また学生から見ればあまりに無責任と言われてもしかたないだろう。高等



真剣に聞く学生も、そうでない学生も…

教育の理想は高く掲げ続けなければならないと思うが、現実の教育実践は目の前の学生の現状と何らかの意味でかみ合ったものでなければならぬ。

さて、経過報告の途中から私見の披瀝へと入り込んでしまったので、もとへ戻ろう。

授業準備の討議の中で、各講義の聴講以外に、授業の中で受講生が主体的に活動する中で学ぶ場を設定することが決まった。全講義終了後ではなく、授業の中で「総合」の契機となる学習体験をさせようというわけである。「総合科目」の受講希望者は多数にのぼることが予想され（実際初年度は、約五百五十名の申告があり、抽選で二百五十名に限定した）、そのままでは個々の学習者の能動的活動を引き出すことは困難であるため、四人のレギュラー担当者がそれぞれ一つずつのグループを指導するという形で、「グループワーク」を設定した。但し、授業計画上「グループワーク」に充てられるのは二回のみ、しかもそのうち一回は全体の場でのグループ分けを含めてであったため、グループでの学習活動は実質一・五回分くらいしかなかった。

（私のグループは、「戦争を知らない世代の私たちは『平和の語り部』になることができるか」というテーマで討論を行なった。詳細はこの授業のテキストとして出版した丹

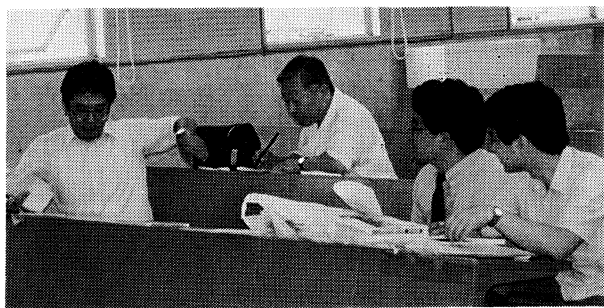
生久吉・佐藤年明・児玉克哉編『平和を学ぶ』（汐文社）所収の拙稿「大学における平和教育実践——教師の試行錯誤の評価を学生諸君に問う——」を参照されたい。）

二年目の一九九〇年度から私が担当教官代表となった。二年目に向けての準備過程では、「グループワーク」の時間をもっとたっぷり取ろうということになった。講義はレギュラー担当者四人が各一回ずつと、飯島宗一前名古屋大学学長にお願いする総括的な講義の計五回にとどめ、六月の四回の授業を全て「グループワーク」に充てた。学外からの非常勤講師（飯島氏以外の三人）は、「グループワーク」の場に来ていただくことにした。四つのグループは、最小の四人（私のグループ！）から最大の約六十人までばらつきがあったが、全体として前年に比べればじっくりと小集団学習に取り組むことができた。

しかし一方で、せっかくながらわざわざ学外から専門家に来ていただいて貴重な講義を聴ける機会を作ったのに、当該グループの学生以外は聴講できないという問題が残った。さまざまな専門家の講義の聴講と、小集団での討議・調査・研究発表などの能動的な学習活動 半期十数回の授業スケジュールの中では、どうしてもこの両者のうち「あちら立てればこちらが立たず」になってしまう。

そこで三年目の本年度、担当者の負担増を覚悟で、これまでの前期一コマから、前・後期各一コマへと枠を拡大し、前期の「平和問題Ⅰ」は十人の講師による講義中心に、後期の「平和問題Ⅱ」は、レギュラー担当者が指導する四つのグループに分かれての小集団学習を中心に構成することにした。

これで前述のジレンマは一応解消したかに見えたが、それでは「平和問題Ⅰ」は講義だけでよいのか？という問題がまた起こってきた。より深く突っ込んだ学習を希望する学生には、引き続き「平和問題Ⅱ」を受講してもらえばよい。しかし「Ⅰ」だけで終わる学生もいるし、やはり聴きつつ放しで終わるのはよくないだろうという



表彰式の準備をする担当教官 取材の新聞記者の姿も見える

ことになった。

昨年は九月始めの最終回の授業で、レギュラー担当者による「自衛隊海外派遣・PKO問題」についての「模擬討論」を行なった。両者が意図的に対立する主張を提起し、議論の過程で司会者の私がワイヤレスマイクを持って学生の中へ入っていき、限られた人数ではあったが学生からも発言してもらった。今年も全体総括の場合はスケジュール上一回しか取れないが、もつと受講者参加の度合を強められないかと、五人のレギュラー担当者が知恵をしばった。その結果、冒頭に紹介した「私にとつての平和・弁論大会」という企画が生まれたのである。

### 活性化された(?) 学生の意識

受講生の参加の場合は最終回の弁論大会で突然設定されたわけではない。

初年度から担当者の側には「楽勝科目と言わせない」という意識が強く、学習の成果を確認するための課題はかなり厳しく課してきた。特に今年度は、初回のオリエンテーションで、三種類のレポートを課すことを予め提示してあった。

第一に、テキスト『平和を学ぶ』全十章のうち今年度の

講師が執筆した九つの章の中から、(全部ではちよつとハードすぎるので)、関心のある四つの章を任意に選んで、その章を執筆した講師の講義の一週間前に、「質問レポート」を提出させた。

第二に、毎回の講義の最後の時間を取って書かせる「感想レポート」。これは出席確認を兼ねていることを匂わせたが、実際には約百二十人の受講生の毎回の出欠チェックは繁雑なので行なわなかった。但し、レギュラー担当者はもちろん、それ以外の非常勤講師にも、前記の「質問レポート」(これは評価対象なので現物を保存してコピーを送付)のみならず、この「感想レポート」(これはコピーを残して現物を送付)も全て届けた。

そして第三に、先にも触れた「弁論レポート」。これは弁士の選考の資料としたのだが、十人の弁士だけでなく全受講者にとつて「平和問題I」における学習を総括するレポートでもあった。但し、選考のための通読作業の仕量があまりに膨大にならないように、また限られた時間の弁論のための予備作業という点からもあまり長いレポートは不適當なので(これは言い訳に聞こえるなあ…)、B四答案用紙一枚の裏表を限度とした。

成績評価については、最終回の授業で基準を発表した。



すなわち、この三種類のレポートのうち「質問レポート」を一つ十点×四で四十点満点(但し提出さえすれば十点を与えるのではなく、内容によってランク付けした)、「弁論レポート」を五十点満点とする。そして弁論大会の弁士にはさらに十点加算する。全ての条件を満点でクリアすれば、素点合計は百点となる。(但し、弁士は時間の都合上十人に限定したので、優秀な「弁論レポート」を提出しながら惜しくも弁士になれなかった受講生にも加算するという配慮を行なう)。

この成績集計はかなり膨大な作業だったが、その中でもしろいことに気づいた。四回の「質問レポート」提出をクリアしながら、最後の「弁論レポート」を提出せずに失格となった受講生が八人いた。非情な言い方だが教師にとってこれは別に珍しいことではない。「おっ!」と思ったのは、四回出せばよいと言った「質問レポート」を五回提出したものが二三人、六回提出したものが三人いたことである。余談だが、五回提出者の中には、先の「弁論レポート」不提出による失格者も一人いる。また五回目のレポートでようやく合格ラインに滑り込んだものもいれば、五回出してもわずかに届かなかったものもいるという悲喜劇も見られる(五回目・六回目のレポートもそれまでのものと

同様の扱いで素点に加算したことは言うまでもない。)

「提出回数を記憶していなかったのだろう。」というのにはあまりにも意地悪な見方だ。やはり、テキストの学習に積極的にくいづいてくる姿勢の表われと見たい。「楽勝科目意識の一扫」という、やや脅迫的な教師の構えにも関わらず、それをむしろ積極的に受け止めて学習に取り組もうという動きが、一部とは言え出てきていると見なしてもよいと考える。

もちろんこのことだけから受講生の意識の活性化を言うとしていいわけではない。そこで最後に、弁論大会に参加した受講生の感想文の一部を紹介し、読者の皆さんの評価にゆだねたい。

#### 弁論大会への受講生の感想

先に述べたように、弁論大会の最後に受講生全員から提出してもらった審査用紙には、最優秀弁士の推薦理由と弁論大会全体への感想が記入されている。さらにアンケートとして、後期の「平和問題II」を受講する意思があるかどうかを記入させている。そこでこのアンケートに基づき、まず、「平和問題II」の受講の意思があると表明したものの、つまりさらに引き続いて平和問題を学習していこうと考え

ているもの（四十五人）の感想の一部を紹介しよう。

弁論大会の弁士十人は、まことにうれしいことに全てこの中に入っている。

「ぼくは大学に入ったとき、何か人とは別の体験をするゾ！と誓いました。そして今日、このような場を作っていただいてほんとうに感謝しております。」（工学部・石黒一倫）

大講義室で演壇に立つということは、教師である我々には日常茶飯事だが、学生にとってはやはり一大経験なのである。

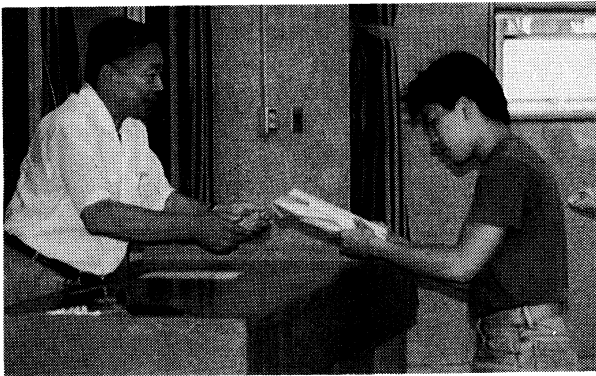
「やはり緊張する等普段の力はでていなかったのかも知れません。しかしできればもう少し時間を増したほうが内容的にすぐれた弁論ができたかもしれないと感じました。」（人文学部・稲葉一将）

大いに緊張して臨み、しかし振り返ってみるともつとじつくりと時間を取ってアピールしたかったと意欲的に総括している。

「出場した人間の感想として、他人、特に多くの他人に自分の考えを伝えることが非常に難しいことを知らされた。十人くらい集った友人、知人の前のようにうまくはいかないんだな、という事実を知っただけでも大収穫だった。弁

論の内容については、何より、すべての人々が、とはいわぬものの、たくさんの意見が出たことを正直驚いて聞いていた。無感動世代だのなんだのという『新人類視』がまるで意味をもたぬものではないかと思った。」（人文学部・池戸聡史）

最後の言葉に対して、現代青年を相手に日々教育実践に取り組んでいる私は、まさに「待ってました！」と言いたい。弁論自体もちろん大切だが、こうした認識に自ら到達するような経験をしてくれたことが、それ以上に貴重である。「それぞれ持論を持っていて感動した。僕の話は少し極論だったが自分の考えに



優秀賞を受ける弁士の稲葉一将君 手渡すのは丹生久吉講師

も自信を持っている。ただ一人一人が始められる平和や理想論では、それは当然の事なんだし、言われるまでもない。でもみんなが持論を持ちそれをぶつけあう事は平和学習の根幹を成すものであり、この学習をつづけていきたい。十番の人は持論がなかったような気がする。」(工学部・淡川拓郁)

淡川君と、次に紹介する東谷君の弁論は、十人の中でやや異色だった。淡川君は自衛隊のPKO・PKF参加に賛成する立場から弁論を行なった。われわれ教官は、講義内容とは違う立場からのこうした主張が出てくることをむしろ歓迎していた。このことには、弁論への講評を行なった高山進教官も特に言及したところである。聴衆の感想も、こうした異色の主張が出されたことに強く反応したものが多かった。次の東谷君も、このことに言及している。

「淡川君の話がおもしろかった。でもあのような話の弁士を選んだ教官側もなかなかやるな、と思った。てっきりこの講義は平和の絶対的な信奉者しか認めないものだと思っていた。また久野さんの話も人前でするスピーチとしてはすぐれていたと思う。私語もなくてとてもおもしろかったが、せめてもう二週間早く決定の通知をしてほしかった。」(人文学部・東谷洋平)

東谷君の弁論は、「平和論への不信」と題するもので、この講義で説かれた平和論が具体的行動提起に欠けていると批判したものであった。私は弁論大会のプログラムを作成するとき、意識的に彼を一番に据えた。講義批判の弁論から始まることで、聴衆の関心を一気に引きつけることを期待したのである。そして彼自身は、自分とは違った角度からやはり講義内容に異論を唱えた淡川君が、この弁論大会に登場したことを評価している。

さて次に、弁士以外の聴衆の感想をいくつか紹介する(ここではまず、「平和問題II」受講を表明したものに限り)。

「十人十色とまではいれないが、それぞれ色んな視点から平和を考えているとわかり、私もそれぞれの弁論を聞くたびに、『あ、そーかこの考えもあつたんだ』と思いついた。その後、私が書いた平和問題のレポートを思いだし、なんて考えの浅いことを書いてしまったのだろうと後悔した。しかし、その後悔よりも、弁論している人に対する尊敬の念が強くおしよせ、感動してしまった。この大会を通じて、同じ年代の人がどれ程深く平和について考えているかわかり、とてもよかった。」(生物資源学部・高谷こずえ)

「みんな自分の考えをもつて話しているのには、たいへんおどろいた。私にはできないことだと思い、すこし自分はずかしくなった。この様な大会はひじょうにいいことだと思う。」（工学部・伊藤信高）

「この大学内でも平和についてしっかり考えているのだと分かった。単位取得というためだとはとても思えないような意見であったのは、この講義がそれだけ濃厚だったという現われでしょう。」（工学部・粕谷 浩）

「（前略）個人個人が考えていくだけでなく、それを公表する場があることが、討論する場があることが、大切だということがわかりました。（後略）」（生物資源学部・鈴木伸二）

「各人それぞれの考えをしつかりもっている。私の考えとは全く異なった人もいた。先生たちの意見をよく理解し、自分なりにまとめた人もいれば、あるテーマについて思っていること、自分の主張したいことをのべている人もいる。もつと、いろんな人の考え、主張などを聞きたかった。もちろん私の主張もあつたわけで私の主張も述べたかった。」（生物資源学部・塚本康貴）

「まだまだ紹介したい意見があるのだが、これくらいにしておこう。弁士と自分を比べてギャップやひげめを感じた

と表明している消極的意見もみられるが、全体的には弁士の弁論に大いに刺激され、学習意欲をかきたてられたことを表明したものが多し。同じ学生の立場からの意見表明はわれわれ教師の予想以上に受講生の意識を刺激したようである。

一方、「平和問題II」受講の意思はないと表明した受講生も、多くはこの弁論大会を積極的に評価しているのである。

「十人の論者はみんな落ち着いて、自分の意見をはっきり述べていてすばらしいと思った。はじめの人は、かなりきついことを言っていたし、私もそれはどうかと思う点があつたりしたけれど、言いたいことを言ってしまうのは大切だと思った。どなたかの話にもあつたけれど、自分と違う人の意見を聞くことはいいことだと思う。更に、論者との討論などであると良いと思った。」（生物資源学部・北條和泉）

「『平和問題I』の講義では先生方は全員戦争反対という意見でしたが今回の弁論者の中には『こういう講義は平和問題の核心をついていない』という意見も聞かれました。やはりこういう講義では弁論大会というものが大切だと思います。なぜなら平和に対する一人一人の考えは違うもの

だし、聞いているだけではおもしろくないからです。」

(工学部・北中敬久)

以上のような意見例から私は、前期の「平和問題Ⅰ」受講を終えてさらに「平和問題Ⅱ」で学習を続けようと考えているものも、そうでないものも含めて、全体として弁論大会の意義を積極的に評価している受講生が多いと判断した。

弁論大会実施前に私がひそかに危惧したことがひとつあった。それは、十人の「すぐれたもの」を弁士として選び出したことに対し、その他の百人以上の受講生がシラケてしまわないか、ということだった。しかし、(感想文を文面通りに解釈する限り)それは全くの杞憂だったようだ。

ずっと以前に私は別の大学での授業で、すさまじい私語の嵐に悩んだ末、教師がしゃべるだけでなく学生を指名して、みんなの前で自分のレポートを発表させれば、少しは聞いてくれるのではないかと考えて試してみたことがある。結果は期待を裏切られ、教師の声より小さく聞き取りにくい学生の発表は、騒然たる私語でかき消されるという事態になった。そのとき私は、「学生は教師に対してよりは仲間の学生に連帯意識を持っているなどと考えたのは甘かった。」と苦い反省をしたものである。

しかし今回の授業を終えて、先の認識は再検討する必要があると思いは始めている。なによりも紹介した学生の意見が私の一面的学生観への有力な批判である。平和問題を学ぶ意思を持った三重大生は、教師の講義からもなにごとかを学びとってくれていると信じたいが、同時に講義を聞きながら考えたことについて学生同士で意見交換することを望んでいる。仲間の声を聞きたがっているのである。

#### さらなる授業実践の発展をめざして

明日から後期の「平和問題Ⅱ」が始まる。四つのグループに分かれて、文献学習や調査活動を行なう予定である。そして来年一月末には、各グループの成果を持ちより、受講生だけの参加ではなく学内に広く呼びかけて、「平和ティーチ・イン」というイベントを一日がかりでやろうと計画している。受講生諸君の反応が楽しみだ。苦勞も多い総合科目だが、今後とも大いに楽しんでやっていきたい。

(一九九二年一〇月一四日記)